

建学の精神とキリスト教 - 501 【第7回】

新島襄の教育観・人間観（2）

同志社大学 神学部教授
良心学研究センター長
小原 克博

1

Overview

1. 新島襄とキリスト教
2. 新島襄の大学観
3. 今回の課題

2

1

新島襄とキリスト教

3

愛以之貫く

「^{ヤソ}耶蘇は何ぞ」と人、問われたれば、答えて曰わん、「^{もつ}愛以てこれを貫く」。キリストの愛は、広く、深く、高く、この愛を以てこの世に来られ、この愛を以て神の道を説かれ、この愛を以て吾人^{ごじん}を救わんがため、^{いばら}荊の冠を甘んじ、十字架に磔^{はりつけ}せられ、又、この愛を以て吾人を引き、この愛を以て今も尚、吾人の心に働く。（説教「愛とはなんぞや」1886年、『新島襄教育宗教論集』177頁）

☞ 『新島襄365』【12月19日】

4

隣人愛（愛人）

然らば如何にせばこれ等〔偏頗の愛国心〕の弊害を防ぎ得るや。これを防ぐの道他なし、各人をして愛人の心を抱かしめ、これを行わしむるにあり。愛人とは何ぞ。且つ如何せば人を愛し得るや。

答、**愛人とは他人を愛する也**。且つ如何せば人を愛し得るや。

予、西聖^{キリスト}の語を用いこれに答えん、すなわち曰く、「己れを愛する如く爾^{なんじ}の隣人を愛すべし」。

（演説草稿「愛人論」年代不詳、『新島襄教育宗教論集』294頁）☞『新島襄365』【9月4日】

5

会衆主義

教派や教義に相違があることは望ましいことかもしれない。しかし教派・教義は魂の救いのための主たる手段ではない。我らの救い主がなされたように、罪人たちに真理を与えること、これこそが先ずなされなくてはならない。真の敬虔さをもってそれをなす人は誰でも、教派、教義以上の存在だ。教派や教義に心奪われて、本質を見落とさないようにしよう。（随想「異国で想う」1885年、『新島襄自伝』382頁）

☞『新島襄365』【11月20日】

7

真理似寒梅敢侵風雪開

真理は寒梅のごとし。あえて風雪を侵して開く。（『新島襄全集』5、563頁）

※新島の漢詩。同志社の生徒であった深井英五に色紙に書いて与えた。新島は、時代の趨勢に抵抗できる精神を真理として語っている。今ある理念は、時代に挑戦する力（真理）となっているだろうか。

6

▼予は望む。我輩の**自由主義**は我が国一般の自由を存し、自治の精神を養う「泉」となるべき事を。然るに今些少の情実の便利の為に、他日漸々この自由を絶たれ、教会の主権は教会にあらずして遂に「牧師集合体」に帰するに至らば、新発明の**自治主義**を去り、従来の寡人政府主義に戻ると云わざるべからず。（「教会合同に関する覚え書（七）」1888年、『新島襄教育宗教論集』262頁）

☞『新島襄365』【1月30日】

8

キリスト教主義の「核」としての 会衆主義

- 1878年、会衆派の諸教会によって「日本基督伝道社」が設立。
- 1886年、その第9回総会で「日本組合基督教会」が設立。
- 1941年の日本基督教団の設立に伴い、55年間の歴史に幕を下ろす。しかし、「自由・自治・独立」の精神は受け継がれる。

9

2

新島襄の大学観

11

平和主義

- 平民主義 平等 同等 (中略)
平和主義 柔和。
(説教用メモ「平民主義」年代不詳、『新島襄教育宗教論集』287頁)
- 海陸軍を増すは^{いよいよ}弥末の浅論なり。
(「地方教育論」1882年、『新島襄教育宗教論集』85-86頁)
☞ 『新島襄365』【8月2日】
- 新島の薫陶を受けた柏木義円が非戦論を展開。

10

宇宙原理の講究所

なぜに大学を要するかと申せば、大学は智識の養成場なり、**宇宙原理の講究所**なり、学問の仕上げ場なりと答えます。又大学は文化の源と、^{いな}否一国の基と申して苦しからず。(「私立大学設立の旨意、京都府民に告ぐ」1888年、『新島襄教育宗教論集』54頁)

☞ 『新島襄365』【2月6日】

12

深山大沢

同志社は是非将来**深山大沢**になし度候間、
貴兄も充分此之為に御工風御尽力被下度奉
仰候

(「徳富猪一郎宛」手紙、1889年6月28日。『新島襄全集』4、165頁)

※新島晩年の愛唱句「深山大沢生龍蛇」は中国古典『春秋左氏伝』卷十六、襄公二十一年の一節

13

願わくば、「**深山大沢、龍蛇を生ず**」の句を服膺し、当時〔現在〕学校に在るは、深山大沢に蟠るの感を持ち、将来、龍蛇となり、芙蓉峰〔富士山〕の上まで達せん事を期し賜え。(「古賀鶴次郎宛」手紙、1889年11月2日。『新島襄の手紙』298頁)

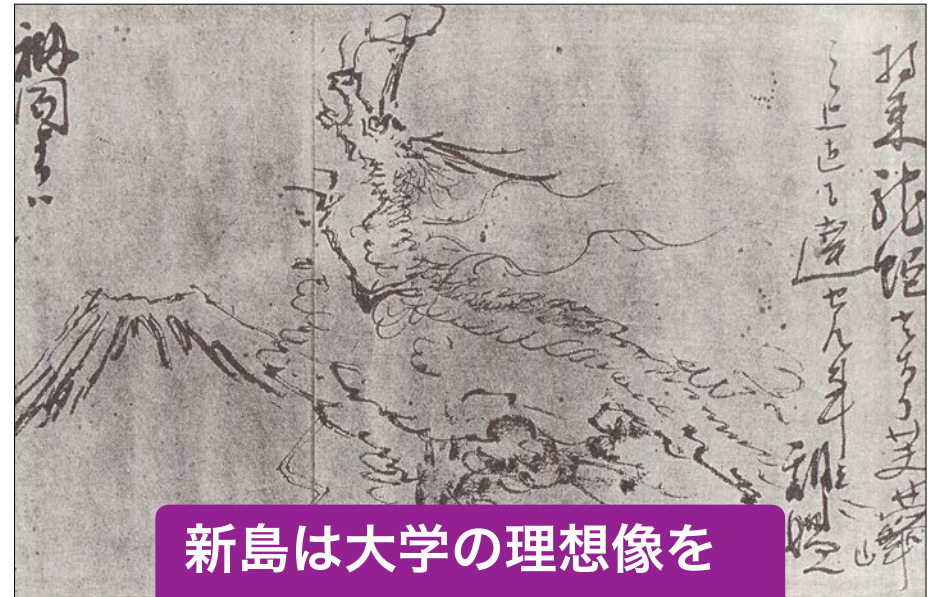
深山大沢生龍蛇

15

世人は我が同志社を評して只宗教主義の学校にして只伝道師を養成するのみと云う。夫れ或は然らん、如何となれば神学専門の一科をおきたればなり。吾人は此の一科を以て足れりとせず、此より進みて文学、法学、理学、医学等の諸学科をおき、**宇宙の天理を講究し**、社会の通則を学ばしめんと欲す。凡大学たるものは偏頗狹隘たるべからず、尤基礎を強固にし規模を寛大に為し、**深山大沢龍蛇を生ずと申して之を深山大沢となし、器量の大、志操の高、目的の大なる人物を養成致し度きものなり。**

(「大学設立主旨」、1889年8月16日、徳富蘇峰秘書写し。『新島襄全集』1、151頁)

14



新島は大学の理想像を「深山大沢」に求めた。

16

学校も機械的の製造場に^{ぜんぜん}漸々流れ行くは、生徒の数も増したるより、自然の勢いにして、止む能わざるところもこれ有るべく候えども、小生平素の目的は、成るだけ法を三章に約し、**我が校をして深山大沢のごとくになし、小魚も生長せしめ、大魚も自在に^{おのおの}発育せしめ**、小魚大魚、各その分に応じ、その身を世に犠牲となし、この美しき日本を早晚、改良して、主の御国、すなわち黄金時代に至らしめん事は、小生の日夜、熱祈して止まざるところなり。

（「横田安止宛」手紙、1889年12月30日。『新島襄の手紙』316頁）☞『新島襄365』【3月18日】

17

人類と「深山大沢」

ホモ・サピエンスは多様性の宝庫とも言えるアフリカのジャングルを離れ、自らの足で立ち、移動することによって、未知なる**次の「深山大沢」**を目指した。

19

深山大沢

様々な個性を生かし育む、
多様性に満ちた環境

- 「龍蛇」のごとく、自らの限界を突破していく。
- 個の尊重：「諸君よ、人一人は大切なり」

18

- 人類史と同志社史の接続
- 同志社大学の未来もまた、未知なる**次の「深山大沢」**を目指す中から見えてくる。

ネクスト「深山大沢」

「次の環境」協創コース

<https://shinzandaitaku.doshisha.ac.jp>

20

3 今回の課題（600～800字）

- ・ 今回の講義の中で、あなたの印象に残った（重要であると思った）点（複数可）を、その理由と共に述べてください。
- ・ 『新島襄365』【8月1日】～【8月31日】を読み、もっとも関心をひかれた日付を《二つ》あげ、それぞれ、その理由を述べてください。